



「北方領土について」

羅臼町立知床未来中学校
1年 芦崎 凧葉

「北方領土問題が存在するため、日露間ではいまだ平和条約が締結されていません。」

私は、この事実を知ってから、目の前に見える島々が遠く、決して足を踏み入れることのできない場所だと思えるようになりました。少し車を走らせればすぐに訪れることのできる納沙布岬からわずか、三.七キロメートルの距離にあるのにも関わらず。「北方領土」、この四文字との心の距離を縮めるにはどうしたら良いのか、今までどのようなことを行ってきたのか、それをこの作文のテーマにしようと思います。

これまで、学校の授業などで北方領土についてたくさんのことを学んできました。例えば「北方領土はロシアに不法占拠されている。」「漁業が盛ん」といったようなことをです。特に、元島民の方々がソ連によって島から強制送還されたという話は、すごく心が痛みます。自分の故郷が奪われるなんて想像もできません。

北方領土について調べているとよく、「ビザなし交流」といった言葉を耳にします。これは、日本国民と北方領土在住のロシア人との交流を目的とした、パスポートやビザを必要としない訪問のことだそうです。思えば、私の母も二年程前、ビザなし交流を行っていました。また、三年程前には、交流の一環としてホームビジットを受け入れたこともあります。こういった交流は、単に北方領土在住のロシア人と友好関係を築くという、目的だけではなく、元島民の方が故郷に帰郷するといった大切な時間であり、なくてはならない行事だと思います。

私が実際に、ホームビジットで受け入れた北方領土の現島民である家族は、父親が漁師をしている家庭でした。そこで私は親近感を覚えました。なぜなら、私の家も代々漁を職としているからです。とても短い時間でしたが、その家族は私達にフレンドリーに接してくれました。私の母は今でもその家族の母親と、連絡を取り合っています。ビザなし交流を経験し、私は思いました。北方領土に住んでいるロシア人も、自分の故郷を悲惨な時代から奪われた元島民も、北方領土の歴史を教えられ育った日本の国民も、互い理解し合えるということです。ホームビジットで出会った家族が心を開いてくれたのと同じように、私も心を開きたいと思いました。

国と国との問題の中では、ちっぽけなことかもしれませんが、国民同士の理解程、問題解決に必要なものではありません。よく町で見かける北方領土返還を求める看板のように、問題の相手国にこちら側の意見だけを訴え続けることで解決するでしょうか。仮に、それで北方領土が返還されても互いの国民が満足して平和条約を締結できるでしょうか。北方領土問題のいち早い解決を願い、これからも理解を止めないよう、努力していきたいです。